

## 四十八歳の方向転換

山田： 親にしても、先生にしても、欲が深過ぎるんですね。あれも、これもできる子であってほしい、そうでなきゃならないと……。

ところで、先生が従来 of 義務教育に疑問を感じられて、『石井式漢字教育』を始められたのは、いつからですか。

石井： 「一般に漢字で表わされている言葉は、初めから漢字で教えよ」という意見を、私が一番先に発表したのは昭和二十六年ですから、今から三十年近くも前ということになります。

それを発表したときには、ぜんぜん相手にされませんでした。いや、それよりも、「とんでもない暴論だ」と受け取られたようです。というのは教育長から注意を受けまして、「君は文部省の教育を批判し、新しい教育法を提案したそうだが、そういうことをするのは大学教授のような学者のやることであって、指導主事としては逸脱した行為である」と言われましてね。確かに指導主事としては逸脱した行為だと私は思ったものですから、指導主事をやめる決心をしました。

それと、もう一つやめる理由がありましてね。それはまったく小学校教育の経験を持たないものが、小学校の先生を指導すると

いうこと、これは良心を持っていたらやれないことなんですよ。そういうこともあって、指導主事をやりながら、つまり、小学校の授業を見ながら、小学校の教師の免許状をとり、昭和二十八年に晴れて小学校の教師になりました。それから昭和四十二年までの十四年間、小学校の子供たちを実際に教えました。

山田： 主義を実行に移したわけですね。

石井： その間、昭和三十六年に『私の漢字教室』という本を書きまして、それに日本の教育がどんなにとんでもない誤りをしているか、ということを書いて発表しました。この本は、十年間に数版、版を重ねるくらい売れたんです。かなり読まれたわけですよ。それにもかかわらず、この教育を実践する先生は、期待するほど現われませんでした。

五、六年続けて実践する学校はあるんです。実践した学校は、いずれもりっぱな成果を収めています。ところが、この教育の推進者である校長、もしくは国語主任がやめたり、転勤したりすると、それを機にやめてしまうわけです。その理由は、教材作りという余計な苦勞があるからというよりも、差がつく教育だということで、他から圧力がかかるので、次第にいや気がさしてくるんですね。だから、一小学校教師に過ぎない私なんか、いくらがんばっ

ても、どうにもならないとそう思いまして、昭和四十二年、小学校を退職しました。それは私が四十八歳の時でしたが、この四十八歳というのには意味があるんです。警察署長だった私の父が、方向転換を計り、退職して百姓を始めたのが、四十八歳の時だったんです。私も四十八歳になってみて、「父はこの年で大決心をしたんだな」と思うと、自分も思い切ったことをしてみようと考えようになったんです。そこで、「小学校の教師をやめて、この教育を広める運動に専念しよう」と思い立ちまして、家内にそのことを相談しました。

ところが、家内は大反対です。昭和四十二年のことですから、子供は二十一歳と十七歳です。「これから子供の学費が要するという時に、安定した職を捨てるなんて無茶だ。勤めさえしていれば、月給は上がるし、退職しても恩給がいい。今やめたら退職金は少ないし、恩給だってもらえない」と言って反対するわけです。そう言われても、私の決心は変わりませんでした。

「一年だけ辛抱してほしい。一年たって、見込みがないとわかったら諦めて何でも言われる通りにしよう」と言って家内に食い下がりました。すると、「もう子供も大きいんだから、子供の意見も聞いてみようじゃありませんか。子供が賛成するというなら、私も賛

成します」と言って、家内も折れてきました。それで、二人の子供を呼んで相談したら、「お父さんのやりたいことをやって、そのためにぼくたちが学校に行けなくなっても結構だ。自分たちは何とかやっていくから、お父さんは好きな道を進んでください」って……。

それで家内は、アテがはずれたわけです。家内としては、上の子供がまだ大学に入ったばかりですからね。下の子供だってまだ高校、大学と残ってますから。だからきっと自分に賛成してくれると思ったわけなんです。そうしたら二人の子供が私の決心に同意してくれたものですから、小学校の教師をやめて、今までの研究をまとめ、これを世間に訴える運動を始めることになりました。だから、まったく定収入というもののない不安定な生活の中で、新しい道に進んだわけです。それから十年間以上、いろんな本を書いて世間に訴えてきたんですが、なかなか思うようには参りません。

山田： それにしても、いいお子さんを持って、よかったですね(笑)。家庭の安定を考えたら、なかなかできることじゃありませんからね。